

世界平和と幼児教育(二)



松 村 康 平

「世界平和は創造されなければならない」という、このことと、「戦争は始まっている」という、前号に述べてあるこれらの、二つのことは、どのように関連しているのであるか。

そこには、

世界平和が創造されながらあることにおいて、戦争が生起しており、世界平和が創造されることによって、戦争を必要とする状況は生起しなくなっていくという、関連性をとらえるのであって、

世界平和は、戦争によって創造される、とか、世界平和は戦争の絶滅であり、戦争の絶滅は戦争によって達成されるという、関連性の把握とは異なり、その把握をも現実形態として可能とするような、基盤的事実の認識が、前号においても本号においても、展開されており、展開されていくのである。

平和のための「関係」心理学。

私は、「関係弁証法」の立場から、平和のための「関係」心理学について、理論構成、技術開発、実践活動を、すすめている。

「一九六六年十月六日、法政大学でもよおされた日本応用心理学会第33回大会の一環として、多くの心理学者が、平和と心理学との問題について論じた」

一九六七年十月に「平和のための心理学」(応用心理研究)が出版されている。「本書は、そのときの記録および、この集会に対して、諸外国から寄せられた文書による提案・意見にくわえて、同年モスクワで開かれた国際心理学会でのペーパーを今田恵教授のご好意で収めることができた。

小冊子ではあるが、この形にまとまるについては内外の、また専門、非専門の多くの人びとの平和への熱意に負うているのである。この書を多くの方々の前にさし出すこと自体が、わたくしたちが心理学者としてなしうる平和へのささやかな貢献になればと願っている。」(「内は、乾孝」)

この本は、二部にわかれている。

心理学者はいかに平和に貢献するか、

心理学は国際関係の改善に貢献できるか、である。

第一部の内容は、提言(乾孝、中川作一)、オスグッドの平和心理学について(田中靖政)、平和問題の社会心理学(南博)、平和と心理学者(城戸幡太郎)と、平和のための「関係」心理学(私・松村康平)である。

私は、ソ連の旅、期待される心像、新しい思考方法、サイコドラマの発想、フロイトとモレノと私たち、モレノとマルクスと私たち、第三者の認識、人間の世界、関係的存在としての人間、意識化による仲間づくりなどについて述べ、九つの提言をしている。

提言は、実践への認識を含む行為であり、その行為に続いて、提言に含まれる理論が、「事実」に即して「真実」をあらしめる方法(技法)によって実現されるようにしなければならない。その責任を提言者は担っている。

提言のひとつは、平和の状況づくりへの積極的参加である。

平和と呼ばれる状況は、関係弁証法の発展する状況であり、平和の状況づくりは、具体的には主として、三者関係の行為、三者関係の変革によって促進される。

関係弁証法の発展する状況づくりは、その実現に協力し合う人々たちによって、続けられている。お茶の水女子大学児童臨床研究室における活動、研究室外での活動が、展開している。

十年前に発足した「看護心理研究会」は、「看護相談センター」としての活動を経て、本年は「看護相談協会」の設立へ進み、医療関係が三者関係的に認識されて、医療行為のなされる状況づくりが行なわれている。この状況では、医師と看護者と患者の三者関係の発展に、患者も看護者も医師も主導的に参加する。従来しばしば非人間的に扱われた患者も看護者も、人間として活動し続けることができる。この活動は、看護学界、保健所・病院・家庭、その他で、重要な役割を果たしている。

二

提言…「人間理解」という考え方を明瞭にすること。

状況における関係の発展が、人間理解を可能にする。人間理解は、状況における関係体験を共にし、その関係の発展に参加する役割体験において、明瞭になる。三者関係の人間理解は、理解す

ることが人間関係（物との関係をもふくむ諸関係）の発展を意味している。人間関係の発展することにおける理解である。（「人間理解の場としての幼稚園」幼児の教育、昭和四十一年第九号、参照）

提言…心理学の研究によって対人関係における真実を明らかにする必要性。

心理学研究者は、次のような事実を明らかにすることに貢献できる。それは、たとえば、ある社会的役割をとっていて、他の社会的役割をとることからしか真実の叫びとしては発せられないものを、あたかも自分たちの立場からの叫びでもあるかのようにそれをとりいれて発言する人たちの、好んで用いる戦略。それが戦略であることを心理学的に解明して、当事者にまた大衆に、知らせることである。またその戦略は、いわゆる社会的地位の上位にある人によって、しばしば用いられ、その戦略における発言は、それが上位の立場から発言されると、発言内容がその立場にいる人においてとらえることのできた優れた識見として、一般に迎えられやすい傾向。その傾向の生じやすい状況の解明も、心理学研究者にはできる。その傾向が顕著にみられる状況は、政治界にかぎらない。学界にも、教育界にも見いだせる。その発言が、結果において指導的な意味を帯びてくる機会の多い人たち。その人たちがあたかも自分の立場においてとらえたものであるかのように、ほ

かの立場において真に意味をもつことがらを、公言する。その巧みさのために、その人をとりまく人たちが、気がつかずにその人を支持するという傾向が見いだせる。その人は、他の場所ではそこにいる人の意見をきき出して、この場所では、自分の立場からしかとらえ得ないこともあるかのように、きき出した意見を自分のものとして述べてしかも、きき出されたその人を、この場所でも低める発言をしていく。その人を、消そうとすらするのである。このような状況を明らかにしていくことのなかでどの立場が、どのような行為の仕方が、人間の実際の可能性を開発するか、開発しているかを、究明する。幼児教育界においても、所属する大学においても、私はこのことを続ける。

提言…人間の心理は、客観的現実から相対的に独立した実在であることの認識。（「相対的独立の認識」幼児の教育、昭和三十一年第八号、参照）

心理学の発展と、この科学における世界各国の提げいは、そのこと自体が基本的に、客観的現実から相対的に独立した人間独自の世界を尊重していることであり、政治関係における葛藤の解決にも、大きな役割を果たすはずである。

提言…評価活動に関する心理学的立場を明確にすること。（「評価活動の関係弁証法」幼児の教育、昭和四十年第三号、参照）

提言…マス・コミ研究、ことに幼・少・青年との関係を解明する

こと。(波多野完治「幼児と視聴覚教育」幼児の教育、昭和四十二年第十一号、参照)

地球が一般には私たちの「環境」とされていた時代から、地球のまわりを「電子環境」がとりまき、地球はその内容になって、テレビやラジオのスイッチをいれダイヤルをまわせば、地球の方でほとんど同じ時刻に起こっていることを、幼児であってもとらえることのできる時代になっている。クールなテレビ世代の子どもが、かかわりあうこと、現在起きつつあることの一部になるのを望むことなどの、説明を必要とする。「マクルーハン入門」大前・後藤訳、サイマル出版会、参照)

提言・心理学における研究方法の変革

三者関係的立場では、関係が発展し可能性の開発される状況技法が、重視される。行為法(たとえば心理劇)は、そのひとつである。心理学研究者たちは、行為法を心理学の重要な研究法として確立する努力を続けなければならない。

日本心理劇研究会は、一九五六(昭和三十一年)年に発足、一九六一(昭和三十六)年に「日本心理劇協会」が結成されて今日にいたるまで、十三年間毎月、第二と第四の土曜日に、午後四時から七時(しばしば九時ごろ)まで、継続して研究会がもたれ、冬期・夏期の研修会も開催されている。

提言・心理学研究者の平和への希求を拡大すること。

心理学研究者—心理学者は、人間のあらゆる活動において、自分たちの課題をとらえる。人間の活動のどれをも「自分たちの課題」とすることができ。

心理学—この科学は、人間の心理過程と心理特性を究明する。この心理学は、人間の意識・行動にはたらかけ、それらを組織的に変革・発展させることができるはずである。そういう心理学でなければならない。

人間のあらゆる活動において自分たちの課題をとらえる心理学研究者は、人間の活動が無限に展開していくことを希求する。この希求を拡大していくとき、どのような体制に突きあたり、どのような体制をつくる必要があるか。このようにして、変革さるべきものはなにかを見だし、変革していく。

提言・政治指導者の養成に心理学研究者が参加すること。

一九七〇年をひとつの時期ととらえての運動の、どの位相においても、人を殺すのがやむを得ないこととして通用する状況は、つくられないようにしなければならない。

三

一九六九年六月十三日の昼すぎ、八百人ほどの女子大生が、学内デモに続いて、校門を出て、大学周辺の地域デモを行ない、国会への請願デモを終え、新橋で解散した。大学立法に反対するお

茶の水女子大学生の運動である。

この請願デモの大きな特色は、自治会執行部、全学闘、一般学生が、統一行動をとったところにある。ゲバ抜きであり、ジグザグデモも行なわれなかった。その前日、全学スト決議が学生大会でなされての、行動である。

これは「ゲリラ的統一行動」であった。

ゲリラ的というのは、昨日の決議が今日の行動に直結して、機敏に、クラスやグループとしての局的活動が活発に行なわれ、また、他大学の立法反対運動との関連は稀薄な、独自の局的活動だったからである。そして、請願デモが実現されたという意味では、「実践的統一」のある行動であった。

それは、イデオロギーの統一がなければナンセンスであるという立場を含みながらも、実現されたのである。ゲリラ的であり、実践的統一があって実現した活動である。そこに、思想的対立はあっても「ゲリラ的統一活動」の可能であることが、実証されている。

社会一般では、そして大学においてもしばしば、学生集団は分裂していると考えられる。学生集団、青年集団の内部分裂は、現体制、成人集団との関連において生じていることの「責任」を、大学では主として教授会、社会では主として既成政党は、と

ろうとはしないで、その分裂を利用して、社会的勢力の拡大をはかろうとすらする。

この情勢にあって、学生青年集団としての実践的統一行動が実現されたことは、意義深い。そこには、「平和の状況づくり」があった。

学生青年集団の統一は、可能なのである。ゲリラ的ではあっても、あたかも時間的連続の断絶した空間的事象のようであって、その機会の、いま・ここで・新しい事象の、出現における、その空間的ひろがりにおける、学生青年集団の統一活動が可能であって、それは、平和の状況づくりである。

学生集団は、現体制との時空的関連を意識的に、また、行動において、切断して（切断しようとして）なおそこに、「青年集団」であることにおいて、未来志向的活動を展開していくのである。学生集団の内部分裂は、現体制、成人集団との連関で出現しても、青年集団であることにおいて、相対的に独立した学生青年集団の主体的活動を展開して、分裂を發展の契機とすることが、可能である。

学生集団の、学生青年集団としての自覚が、各成員において成り立つるためにも、学生青年集団の理論（集団理論）が構成され、技術の開発、実践活動が推進されねばならない。青年集団の活動は、それ自体が、現体制の変革を意味している。

学生青年集団は「集団」としての一般的特性を成人集団と共有しながら、独自の集団特性を、活動において形成しながら、現体制の変革促進者としての役割を果たす。

学生青年集団としての独自の理論と技法と実践を欠いて、政党成人集団との連けが強化されるとき、学生青年集団は、集団としての凝集性を失って分裂をきたしたり、日和見的な集団維持活動を展開しやすくなる。大学を総体的にとらえたときの構成集団としての学生集団と教授集団との関連においても、対応的に、類似の事実をとらえることができる。

四

平和の創造されている状況をとらえて、発展させなければならぬ。平和の状況づくりを促進し、その速度をはやめ、拡大していかなければならない。

集会を終えて激しいデモへ集団が移動していく。そのあとに残される広場を清掃する人たちが、集会に参加した人たちから出て、この人たちがデモを追いその集団とひとつになる。そこに

デモる集団がデモを規制する集団と激突して、死を呼ぶ乱闘の最中に、あと一撃のそのゲバ棒を必死にすがってとめる。そこに

平和の状況づくりがある。

平和の状況づくりは、実践である。観念の遊戯ではない。「物」

の機能が転換する「行為」である。

安田講堂の学生たちに、無用な抵抗をやめる呼びかけをして、呼びかけの「ことを媒介とする」新しい状況が生起するとき、いま・この時点（事点）において、この状況を担う責任者のひとりとして、呼びかけの発動者でもある人は、機動隊に学生が連行されるのを、とどめたであろうか。「物」「人」「自己」の関係を基盤とする「人間」の、物の機能が転換する平和の状況づくりを、学生たち、呼びかける人、機動隊は、どのように自覚して推進していたであろうか。

この人たちは、どのような「幼児観」をいだく人たちか。どのような実践をもたらす、幼児に関しての理論的・技術的認識であるか。激突するいま・この状況に「幼児」がいるとき、どのようにふるまう人たちであるのか。幼児への配慮にひるむ相手にスキをみて、つけいる人たちであるか。幼児への配慮がその人たちの活動の密度をたかめて、人間の実際の可能性の実現する速度をはやめる、そのような幼児観をいだいてふるまう人たちであるか。青年たちは、そのような幼児観をいだいてふるまえる人たちではないか。

幼児教育関係者たちは、幼児との関係の発展が、どのような理論と技法と実践においてもたらされるかを、具体的事実即して明らかにして、世界平和に貢献しなければならない。